

地域包括支援センターを核とした、 高齢者見守りネットワーク構築 ～おおた高齢者見守りネットワークの活動～

中村 一孝 氏

澤登 久雄 氏

おおた高齢者見守りネットワーク 代表

おおた高齢者見守りネットワーク発起人
大田区地域包括支援センター入新井 センター長
社会医療法人財団 仁医会 牧田総合病院 医療福祉部 兼
在宅医療部 部長

要旨

「高齢化の一途をたどる大都市東京において、高齢者が住み慣れた地域で生活を継続するためにはどうしたらよいのか？」この課題解決に向けて、大田区地域包括支援センター入新井の呼びかけで、高齢者に携わる各種専門機関と地域団体、企業等が協働し生まれたのが、本会「おおた高齢者見守りネットワーク」です。

本会の主な活動は、地域で暮らし、働く全ての人々と協働し、地域住民を対象とした、「地域づくりセミナー」の開催、「高齢者見守りキーホルダーシステム」の基盤づくりから普及啓発、高齢者が社会的役割を持てる場である「みま～もステーション」の以上三本柱の他、各地域団体・専門機関との連携に資する、研修会・イベントの実施等です。

高齢者の孤立を予防するためには、高齢者自身が、元気なうちから地域とつながる意識を持ち、出来れば早い時期に地域包括支援センターともつながっていること、そして地域の中で身近な人の異変に気付き、専門機関へ早期に連絡できることが必要です。地域のつながりが薄いと言われる大都市ですが、一方では多くの人が住み、働く人材の宝庫、社会資源の宝庫であるとも言えます。本会は『気づき・見守り・支え合う地域づくり』を合い言葉に、そのような大都市のメリットを活かした、都市型の見守りネットワーク構築を目指しています。

1.会発足の背景と経緯

(1)地域包括ケアの現場の現状

地域包括支援センターは、2006年4月の介護保険制度改正に伴って創設されました。以来、高齢者の心身の状態に合わせた健康維持や生活の安定、医療・保健・福祉の向上、さらには財産管理、虐待防止といった課題に対し、当該地域で総合的な支援とマネジメントを行い、課題解決に向けた取り組みを実践していくことを主な業務とする包括的な拠点として存在してきました。全国の自治体で2010年4月現在、4,056ヶ所の地域包括支援センターが設置されています。そして、高齢者の総合相談窓口として設置された地域包括支援センターにおける相談件数は、高齢化の進展等に伴って年々増大しており、私たちの活動拠点である東京都大田区でも、20ヶ所ある地域包括支援センターでひと月あたり約1万件もの相談に対応しています。

大田区の人口は2011年10月1日現在、694,916人で

23区中3番目に多く、高齢者数は142,218名、高齢化率20.4%です。つまり区内の5人に1人が65歳以上の高齢者です。

そんな大田区の北東部に位置し、昔ながらの住宅地や商業地が広がる大森地区に拠点を構えるのが、私が勤務する地域包括支援センター入新井です。ここで対応している相談は、月に500件を超え、増加傾向にあります。今後、急速に高齢化が進んでいくこのような大都市部において、地域包括支援センターが介護保険制度の枠組みの中だけで、まるで「もぐらたたき」の様に一つ一つの相談に対応しているだけでは、高齢者が安心して暮らせる地域などできていきません。まして、これから一人の高齢者が抱える問題が多問題化、複雑化していくことを考えると、個別対応すら一筋縄ではいかず、むずかしくなることは明らかです。今こそ、地域住民と地域で働く医療・保健・福祉専門職が広くつながり合い、高齢者を支え合うシステムづくり、町づくりが求められているのです。

(2)会発足の経緯

このような地域包括支援センターが「もぐらたたき」の現状から抜け出し、本来の意味で地域包括ケアの中核機関としての役割を果たすには何が必要か・・・、そのような思いを抱いていた折、時期を同じくして発表されたのが「東京都地域ケア整備構想」でした。この中には、10年後の東京で高齢者が住み慣れた地域で生活を継続できる社会の実現を目指すための基本指針が示されており、医療・介護・住まいと見守り等の地域ネットワーク構築など、サービス基盤の充実に向けた方向性が示されています。

これをもとに、2008年4月に12名の福祉専門職と地域の老舗百貨店・ダイシン百貨店の社員3名で、現在の前身である、「大田北高齢者見守りネットワークをつくる会」を発足しました。そして2009年1月、活動地域を大田区蒲田地域にも拡大したことに伴い、現在の「おおた高齢者見守りネットワーク(愛称『みま～も』)」に改名し現在に至ります。

2.みま～もの概要

(1)組織概要

本会は任意団体であり、会の趣旨に賛同いただいた各種団体の賛助会費によって運営しています。2013年4月末時点で、賛助会員は、病院・クリニック7、企業・法人21、在宅サービス事業所33、施設4の合計65団体、後援は、大田区、医師会をはじめとした12団体です。賛助会員の方々は、運営費の捻出だけでなく、会の運営に積極的にに関わり、その中で専門性を発揮し、団体としての地域貢献を実現しています。

(2)みま～もの目指すネットワーク

高齢者医療・福祉において、ネットワークの必要性が叫ばれて久しい中、具体的なネットワークの形は未だ見えないのが現状です。そのため活動を開始するにあたって、ネットワークについての共通認識をもつことが必要であり、本会が目指すネットワークを次のように具体化しました。

【ネットワーク①「気づきのネットワーク」】

地域に暮らす高齢者と日常的につながりのある人たちが、普段の関係性の中で高齢者の異変に早期に気づくためのネットワークで、友人、ご近所同士、町会、老人会、商店街、銀行などがその構成者に当たります。

【ネットワーク②「対応のネットワーク」】

先に述べた「気づきのネットワーク」による地域での早期の気づきをもとに包括的・継続的支援を実施していくため

のネットワークと言えます。具体的には、地域包括支援センターのほか、医療・介護・福祉の専門機関等がこれに当たります。

以上「気づきのネットワーク」と「対応のネットワーク」が各々有効に機能し、尚かつ2つのネットワーク間が有機的に連携できるシステムづくりが、私たちの目指すネットワークであり、目標です。《図1》

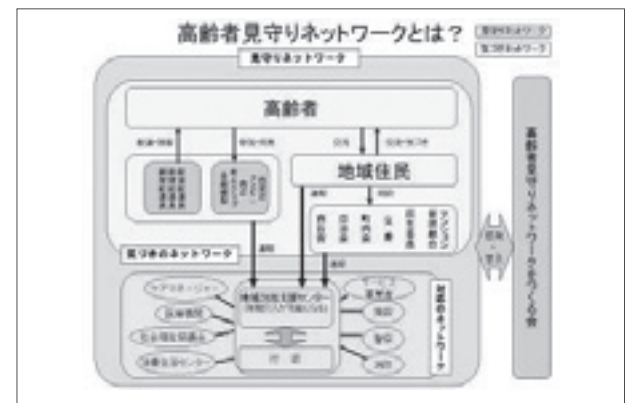


図1

(3)活動の三本柱

1.「地域づくりセミナー」

「地域づくりセミナー」の目的は以下の3点です。

- ①地域住民に「気づき」の視点を伝え、ご近所の「異変」に気付くことができる(ご近所に関心を持つ)人を増やすことができる。
- ②地域住民の「気づき」を、適切な時期に地域包括や専門機関につないでもらえるよう、地域住民と地域包括支援センターや専門職との間に顔の見える関係をつくっておく。そのため講師は、基本的に地域の専門家にする。
- ③賛助会員である専門職が、セミナーの企画・準備・運営などを、職種や法人の壁を越え一緒に行うことで、対応のネットワークの成長につながり、迅速かつ適切な個別対応につながる。

地域づくりセミナーは、年11回開催、毎回90～100名の地域の方が参加され、最も多い年代は70～80歳代の高齢者です。そのため、見守りに関する事に限らず、介護予防や健康など高齢者が興味を持って頂けるようなテーマにしています。また、年1回「特別地域づくりセミナー」として、250名規模で、認知症をテーマに、講義だけでなく、音楽を楽しめるセミナーも開催しています。参加された方が次回は友人を誘って参加してくれ、リピーターになっていくケースが多く、またアンケートからも満足度の高さが

分かります。《写真1》《写真2》



写真1



写真2

2. 「高齢者見守りキーホルダー」

「高齢者見守りキーホルダー」とは、事前に地域包括支援センターに本人情報、緊急連絡先、かかりつけ医療機関、病歴等を登録し、個人番号の書かれたキーホルダーを配布します。キーホルダーをもった方が、外出先で救急搬送された際や、認知症の徘徊などの際、警察や消防から地域包括に連絡が入り情報を共有することが出来るシステムです。前述の地域づくりセミナーの講師をして下さった地域の病院の医療ソーシャルワーカーとの打合せの中で、「本当の意味で高齢者の安心に繋がるものを生み出したい」という共通の思いの中から生まれ、何度も話し合いを重ね、消防・警察など関係機関との調整を経て、企画から2ヶ月後の2009年8月に大田区内一部地域で申請を開始しました。その後2年間で3,500名の登録があり、「全ての区民が登録出来るシステムにして欲しい」という多くの区民の声があり、2012年より、大田区の高齢者施策として全区で登録可能となりました。2013年2月末現在の登録者数は13,895名で、大田区内高齢者の10人に1人がキーホルダーをもっていることになります。また、全国からの問合せや反響も大きく、いくつかの自治体でもこのシステムがスタートし広がりをみせています。《図2》



図2

3. 「みま～もステーション」

2009年より賛助会員である有料老人ホームを拠点に月1回開催してきた食事会「みま～もレストラン」が発展し、2011年、より一層地域に根ざした形で活動の幅を広げたのが、「みま～もステーション」です。

大森柳本通り商店街振興組合と協働し、商店街の空き店舗を改修したお休み処を拠点とし、誰でも気軽に立ち寄り、高齢者が役割をもって活動できるサロン事業を行っています。ミニ講座や公園の管理運営、商店街と合同のお祭りなどを、地域の高齢者とともに実施しています。2012年度はミニ講座を108講座開催し、700名を超える高齢者が参加されました。また、公園の管理運営や夏まつりなどの開催にあたっては、高齢者自身が参加者としてだけでなく、ボランティアとして運営に参加しています。この高齢者は「みま～もサポーター」として登録し、年会費を支払い、本活動の応援者として活躍してくれ、現在65名いらっしゃいます。《図3》《写真3》《写真4》



図3



写真3



写真4

2012年8月からは、商店街が「商店街コミュニティ活性化事業」を利用し、閉店した店舗を改修し、「アキナイ山王亭」をオープンさせました。「商店街コミュニティ活性化事業」とは、商店街の空き店舗を活用して、自由に使えるトイレや休憩場所を設け、地域コミュニティの活性を目指す大田区の事業であり、その「アキナイ山王亭」を「みま～もステーション」の拠点として使用しています。《写真5》



写真5

(4) みま～もの今後

超高齢社会の到来を控え、福祉の現場は今、大きな変革の時期を迎えています。その大きな要因の一つは、一人一人の高齢者が抱える問題が多問題化、複雑化しているということにあります。例えば、多問題を抱え、人との関わりを拒否している高齢者の問題解決のために、たった一人の専門家が関わったところで、その扉を開くことはできないでしょう。

私たちは本活動を通して、「地域全体で高齢者を見守ることの重要性を地域の人たちに知ってもらうこと」、そして「この地域で医療・保健・福祉の専門職たちも一緒に手をつなぎ合い、さらにその事実を地域住民に広く伝えていくこと」が必要なのだ、と考えています。

私たち医療・保健・福祉専門職が目指す最終目標—それは「SOSの声を自ら上げることのできない人たちに自分たち専門職の手が届くこと」です。その実現に向かって、私たちはこれからも多様な機関と連携し活動していきます。《図4》



図4